
運命のおにぎり

雪花舞莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命のおにぎり

【Nコード】

N8431L

【作者名】

雪花舞莉

【あらすじ】

日本みたいな、中世のヨーロッパみたいな、そんな場所で、青年は生まれてはじめて、おにぎりという食べ物に出会います。でも出会ったのは、おにぎりだけじゃなくて・・・？

おにぎり以外は、完全ベタのシンデレラストーリー。

ついでにジェットコースター的な。

全部は書ききれないけど、書きたいことだけ、ちゃちゃちゃと書きました。

青年は出会う

その町には、一軒のおにぎり屋さんがありました。

父親から続くそのお店は、娘さんが一人で仕切っていて、小さいけれど、味は申し分なく、常連さんもいました。

昨日と同じ一日が明日も続き、娘さんは毎日おにぎりを握るのだと思っていました。

悲しみではなく、幸せとして、そう思っていました。

けれど、もちろんお話とはそういうものではなく、人生にはそういうお話がつまっているからこそ興味深いのです。

ある日、一人の青年が店の前を通りがかるところから、お話が始まります。

昨日と同じとは限らない、明日とも違う一日の幕開けです。

青年は地味な服装ながら、上品さが伝わってくる、ぶっちゃけ領主の息子でした。

おにぎり屋のある一角は、再開発計画があがっていて、領主の息子は下見と称してお忍びで歩いていたのです。

お店のショーケースには、何やら見たことのない小さな黒い固まりがいくつもあります。

一体なんだろうと、好奇心旺盛の青年は、近づいていったのです。

「いらっしやいませ」

娘は笑顔で応対しました。

「あの・・・これは、何ですか？」

流暢な言葉をしゃべっているけれど、旅人かしら。娘は思います。

「これはおにぎりと言って、伝統的な食べ物です。ご飯を握って、中におかずをいれて、海苔で巻きます」

旅人の応対にも慣れたものでした。

「はじめて見た」

青年は、にかつと笑いました。

背は高いけれど、あどけない表情、誰にも好かれるような雰囲気、青年に、娘も気持ちがよくなって、

「試食してみますか？」

おにぎりを一つ取りだしました。

「ありがとう」

青年はおにぎりを受け取り、がぶりと一口。

「・・・うまい！」

「よかった」

娘は自分自身が褒められたかのように嬉しくなりました。

「この・・・むぐむぐ、中身は・・・何ですか？」

「鮭という魚です」

青年はもちろんこの国の人間ですので、鮭は知っていました。

ご飯でくるむなんて・・・斬新だなあ！

おにぎりそのものに感動した青年は、

「これはおいくらですか？」

あつという間に完食しています。

「鮭のおにぎりは120円です」

「マジで?!」

良心価格に驚く青年。思わず口調もくだけです。

「はい」

「それでこのお店はやっていけるんですか？」

「なんとか」

この辺の物価を頭に叩き込んでいた青年は、きっと高くすると売れないんだ、赤字覚悟でやっているのだ、と想像します。

「ではこれ、全部買います」

「・・・え？」

マイケル買いに呆然とする娘。

「おいくらですか？」

「全種類、ということですか？」

「いえ。全部です。カードは使えますか？」

「カードは使えません。というか、全部は困りますし・・・」

青ざめていく娘に、お店のものが売れれば喜ぶと思つた青年も、しよんばりします。

きつと鬼のような親方が、ご飯を握れと責めてくるに違いない。

青年は妄想力が逞しくもありました。

「そうですか・・・今は持ち合わせがありませんが、今度また買いに来ます。その時は全部と言いませんので、ご心配なく」

爽やかな笑みを残し、去っていく青年。

何だっただなとしばし立ち尽くす娘。

お土産にするのは難しいと説明したほうがいいかしら・・・？

それとも旅のお供に、塩をたくさんかけようかしら？

何はともはれ、これが運命的な二人の出会いとなつたわけです。

青年はハマル

「なあ、おにぎりって知ってる？」

所変わって、こちらは領主の館です。

青年は家に帰ってすぐ、友達でもあり同僚のマサムネを捕まえました。

「はあ？」

領主の息子が突拍子もないのはいつものことですが、それにしても『おにぎり』です。

何を今更・・・マサムネは呆れました。

「知ってるけど？」

「何で教えないんだよ！」

今度は逆ギレです。

「俺に言っناよ」

というか、知らなかったのか・・・呆れを通りこして、可愛いそうになってくるから不思議です。

「すげーうまい店があつたんだよ」

「へえ。下見に行ったんじゃないの？」

「下見のついでに、見つけたってわけ」

どっちがついでか、わかったものじゃありません。

「でもカードが使えなくてさ・・・お前に買って来れなかった」

自分を買ってくるつもりだったのか・・・マサムネは気分も上がり、青年を抱きしめます。

「え・・・ちよっ、何?!」

「かわいいなあと思って」

長身の青年よりも頭一つ大きいマサムネは、力も強いので、逃げ出すことができません。

「ちょ、やめろって！ 誤解されるだろ！」

「いーじゃん。誤解させようよ」

ぎゅうぎゅう抱きしめて離さないマサムネ。

もちろん、館に勤めるメイド達が、こそこそと遠巻きに喜んで見ていたことは、言うまでもありません。

娘には3人の弟と2人の妹がいました。

母親も父親も亡くなり、娘が一人で面倒をしています。

「ねーちゃん、何か嬉しそう」

夕飯の途中で、一番年長のトマスが言いました。

「え?！」

「私もそう思ってたー。何かあったの?」

エミリも続けると、何も分かってないような子達も口を揃えます。

「ねーちゃん、何かあったー」

「な、何もないわよ。さつさと食べて!」

夕飯は売れ残りのおにぎりであることが多いのですが、弟妹たちはお姉ちゃんの作るおにぎりが大好きでした。

あやしいな・・・という視線を送りつつ、おにぎりを頬張ります。

変なこと言わないで。娘は呟きつつ、気づけば昼間の青年を思い出しています。

鮭じゃなくて、いくらにすればよかったかな・・・もし来たら、次はいくらにしよう。

ほとんど中身の対策でしたが、考えもまとまり、空になった皿を片付けます。

「ねーちゃん、まだ食べてる!」

トマスの声は聞こえません。

次の日。青年は来ませんでした。
旅立ってしまったのかしら。

残念に思っていた、その次の日。

「こんにちは」

突然の訪問に娘は石になります。

「また来たよ」

「あ、い、ら、らっしゃい！」

魚屋のおっちゃんのようなかけ声が出てしまい、焦る娘。

そんな娘の様子には、一ミリも気づかず、青年はじーっとおにぎりを見ています。

「全部は買えないからー、この前の鮭と、おススメをください」

「はい！あの、いくらと、いくらってのいうのは、魚の卵なんですけど」

「うん。いくらね」

「あと、梅干し！」

予定にないものまであげようとすると、

「梅干し？」

青年の顔がゆがみます。

「すっぱいやつだよな？」

「お嫌いですか・・・？」

落ち込む娘。

「うん。でも、食べてみるよ」

「いえ。外国の方には、お口に合わないかもしれませんし・・・」

「んーん。じーさまにも好き嫌いするな！って言われてるしね」

その三つください。

や、優しいかも・・・。

手袋をはめた震える手で、おにぎりを掴み、竹の皮でつつみます。

青年はその手順も面白いらしく、食い入るように見ています。

「380円です」

「はい」

青年は一万円を渡すと、

「お釣りはいららないよ」

「え?! で、でも・・・」

「ごめんね。コインが重くて」

コインだけじゃありませんけど！

言う間もなく、ダッシュで消える青年。

お金持ちなんだな。

返すことのないお札を持ちながら、娘は取り残された気持ちで、青年が消えた方向をいつまでも眺めていました。青

青年は怒られる

「確かにうまいなー」

マサムネは、青年が自慢げに差し出した鮭のおにぎりを食べながら言いました。

「だろ？　なんでこんなにうまいんだろうなー」

ルンルンと、鼻歌交じりに一個を食べ終わると、青年は残った一個をじーっと見ています。

「食べないなら俺がもらうけど？」

しびれをきらして何気なく言えば、

「食べるに決まってんだろ！」

そう返事をしつつも、一向に食べようとしません。

「飾るつもりか？」

「違う。これ・・・梅干しなんだ」

「あー。おまえ、苦手だもんなー」

もちろん、ご飯のお供に食べることもありますが、すっぱいのも甘いのも、青年は苦手でした。

「何で買ってきたんだよ」

「だって・・・」

あの子がおいしいって言うから・・・。

「あの子！ー！」

マサムネが反応します。

「なんだよ」

「あなた。恋のよ・か・ん？」

「ちげーよ。バカ！」

蹴りを入れて、がぶり。

「む」

食べて固まったまま、もぐもぐして、飲みこみます。

「・・・どうだ？」

「・・・うまい」

そのまま、二口で食べ終えます。

「へえ。いい梅干しでもつかってんのかな」

もちろん、領主の食卓に並ぶ梅干しは高級品ですが、安くておいしいものがあることを、マサムネは知っています。

「すごいな」

青年は、娘を思い浮かべました。

裏に梅の木でもあるのかな。

次におにぎり屋を訪れた時、青年は梅の木の所在を尋ねる間もなく、娘に怒られました。

「お金を無駄にしてはいけません！」

「は、はい！」

「一円に笑う者は一円に泣くという言葉を知らないのですか？」

「はい。い、いえ！」

あまりの剣幕に押される青年。後ずさりしながら、謝ります。

「ごめんね」

その言葉で娘ははつと気がつく、見ていてわかるほど血の気が引いていきました。

「あ。ああわ、わたし、なんていうことを・・・お客様に・・・なんてことを・・・」

「だ、大丈夫？」

青年が支えようとショークース越しに手を伸ばそうとすれば、

「ひええええ」

奇声をあげて、飛び去ります。

驚く青年。

「ご、ごめんなさい。あの、私、あの」

「落ち着く！」

青年の鶴の一声に、娘もシャキンと背を伸ばします。

「大丈夫だから。落ち着く。わかった？」

「はい！」

「ん」

青年は笑って、手を伸ばしました。
娘も思わず、握り返します。

「はい、仲直り」

青年は今度はお釣りを受け取り、こんぶとおかかを買って帰りました。友達にも食べてもらいたいから、10個くらい買ってもいい？
青年の問いかけに、仕掛け人形のように頷くしかできない娘。
魔法の言葉にかかってしまったみたいです。

前回のお釣りを返していない気づいたのは次の日の朝でしたが、それは貰っておいて。青年の魔法の強制力で、またしても頷いてしまった娘なのです。

青年は知らない

「俺も行きたいな！。噂のおにぎり屋さん」

マサムネの何気なさを装った発言に、

「ダメ！」

青年は断固として拒否しました。

「なんでだよー」

「減る！」

「減らねーだろ」

「お前が行くと、減る！」

そう言われると行きたくなるのが人間の常です。とくにマサムネは、その日、青年に抜けられない会議があるのを知っていたマサムネは、さつさと街に繰り出しました。目指すは、再開発予定地のおにぎり屋さんです。

「いらっしやいませ」

営業スマイルの先にいたのは、長髪で背が高く、鎧と剣を身に付けた青年でした。

軍人さん・・・？

めずらしいお客さんに、少し緊張する娘。

「あ。全然あやしいものじゃないよ。ここのおにぎりを友達に勧められてね、来た者です」

にこり。笑っても迫力のある男。

「は、はい。ありがとうございます」

「お勧めはどれ？」

「えと、そうですね。人気があるのは、鮭です。あと今日は焼きタラコも出ています」

「へえ。焼きタラコか」

それはあいつも食べたことないな。

にやりと笑って、「それください」

竹の皮につつんでもらって、お金を渡します。

「その友達なんだけどさー。覚えてないかな。カードで買おうとした奴」

あの人だ！

知らず胸が高鳴る娘。

「バカだよー。こんな店でカード使えると思ってんの」

けれど男の冷たい言葉に、凍りつきます。

「ごめんね。あいつ、お坊ちゃんだから」

「え・・・？」

「知らない？ ここの領主の息子」

この国では、その土地土地の領主が権力を持ちます。

政治も経済も、領主の承認なしで行うことができません。

「あいつ、再開発プロジェクトのメンバーなんだよね。ここには下見で来てるってわけ」

ここって予定地の中心でしょ。

再開発・・・町内会で話題になっていたことを思い出しました。

観光客を呼び込むために、領主が土地を探している。

あの方は、ここを潰すつもりで・・・。

手の中にあったおにぎりを見つめます。

水が一滴、落ちていくのが見えました。

「もう食べられない」

「やりすぎちゃったかなー」

マサムネはおにぎりを頬張りました。

「だって、本当においしいからな」

ヤキモチ？

なんてね。

青年がほんとうに好きなもの

「お、おまえ、まさか」

竹の皮につつまれたおにぎりや、青年は指差しました。

「焼きタラコだよ」

「何それ。じゃねえよ！ 何勝手に行つてんだよ」

「なんで行くのにお前の許可がいんのよ」

マサムネの態度に青年は気づきます。

「お前、余計なこと言つてないだらうな？」

「余計つて？」

「だから」

「例えば、お前が領主の息子つてこと？」

「痛てて・・・」

殴られた頬をさすりながら、マサムネは焼きタラコを頬張りました。

「さて。どうなるのかな」

青年が出て行つた扉を見ながら、「焼きタラコ、うまつ」マサムネは呟き、

彼女ほしいなー。心から思つたのでした。

ドンドンドン。

夜なのに、お店のシャッターを叩く音がします。

治安が悪くないとはいえ、夜の訪問は滅多にあることではありませぬ。恐る恐るシャッターを上げると、信じられない人が息を切らして立っていました。

「どうして・・・」

「ごめん！」

青年は膝に頭を打ちつける勢いで謝りました。

「・・・なんで謝るのですか？」

「自分のこと、言ってなかったから」

「・・・ここには、再開発のため？」

「この地域に来たのはそうだけど」

「帰ってください」

「聞けって！」

青年は娘の腕をとりました。

「このお店に来たのは違う！ おにぎりが美味しかったから。ほんとうに、初めて食べたんだ」

「そうだとしても。あなたが謝ることじゃないわ」

青年と娘は目を合わせたまま、沈黙が走りました。

青年は謝罪の意思を。

娘は拒絶の意思を。

お互いの瞳に秘めたまま。

「信じてほしいのは」

青年が口を開きました。

「僕は、このお店のおにぎりが好きだ」

「わかってる。傷ついたのは、私の勝手な思い込みで」

「君のことも好きだ」

信じられない。娘は目を見開きました。

喜ぶべきことなのに、驚きが先立ち、不信感がわいてきます。

「再開発のことは関係ない。確かに僕は、プロジェクトのメンバーだけど、決定権を持っているわけじゃない。この地区の人と話し合っ
つて、合意の上で進めたいとも思ってる」

青年の真摯な声が、辺りに響き渡ります。

「僕は、はじめておにぎりを食べたけど、断言できる。君が作ったおにぎりだから、こんなに美味しく感じたんだ。梅干しだって美味しい
と思った」

魔法にかかったみたいなんだ。

「・・・私と、あなたでは身分が」

「その前に大事なのは」

娘の両手を、外側から強く握りしめます。

「君は、僕のことをどう思ってるの？」

暗い道の途中で、一軒のお店から明りがもれていました。

お店の前には男性と女性が立っていました。

二人は抱き合って、おでこを合わせていました。

お店の奥で、五人の子供達が覗いているのは、まだ秘密です。
もう少しだけ、二人の時間をあげましょう。

「今更なんだけどさ」

「はい」

「順番めちゃくちやなんだけど」

「はい」

「名前、聞いてもいいかな？」

青年がほんとうに好きなもの（後書き）

名前が入らないじゃないかー！！
すみません。

改めまして。読んでいただき、ありがとうございました。
心ふるえるほどに嬉しかったです。

気力がたまれば、マサムネくんのお話を書きたいのですが・・・
い
つのことやら。

またどこかでお会いできたら、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8431/>

運命のおにぎり

2010年10月15日01時36分発行